

創造生活の条件（下）

超越

価値

前号においては『矛盾と統一』について語りました。矛盾がなければ統一もなく、統一のない矛盾もない。統一だけでは統一は無意味であるし、矛盾がなければ発展創造もあり得ないことを語っておきました。人生は矛盾だらけである。然もその中に、何時もはつきりとした統一がある。この矛盾と統一とを我においてはつきりつかんで生きる所に宗教があることを語っておきました。

木号では更にそれをもつと深めて申し上げたいと思います。

創造と言えば、人生々活に意味を発見することだとも言えます。即ち、美と言ひ、善と言ひ、真と言ひも、これら、真喜美等は、一つの立場から人生の価値を創造せんとするのであります。そして宗教は、それらよりも、もつと深いところにおいて、人生をつかみ、人生全体の価値を創造し、全体としての型なる理想を成就せんとするのであります。

善悪摂取

親鸞聖人はしばしば「仏智不思議の前には、善悪淨穢による差別はない。」ことを説いておられます。我々は理性的な要求、即ち善を求め、実践しようとするものであるのに、更にその善悪を超えよと教えていられるのは、一体何を意味するのであろうか。これは一面において、倫理と宗教とを分化せられるのであろう。けれども単に、道徳と宗教とは違うというような外面的なことではあり得ない。即ち化身土巻において、廃立、隠蹟の両面より、倫理的宗教より純粹宗教への転入をこまやかに詳述されてあるが、ここにはそのことについては説く暇はありませんが、その心を述べてゆきます。

京都において、ある芸術家の一群が座談の席において、美について語っている時、甲の言く、

「近松はその淨瑠璃において、よく心中ものを扱ったが、彼は心中を美化したのだ。又ロダンは梅毒による鼻かげを彫刻したが、彼は鼻かげを美化したのだ。」

と言ったのに対して、乙は論駁して、

「そうではない。近松は心中そのものに美を見たのである。ロダンは鼻かげを美化したのでなくて鼻かげの中に美を見たのである。」

と対立し、醜は美と対立するところの美は、本能的な美であつて芸術の美ではありません。あの人は美人だという時の美は醜と対立する美であつて、結婚の時に言われる美でありますが、芸術家は、日本一の美男やミス日本のみを絵にしたり、彫刻したりするのでなくて、如何なる醜婦すら絵にします。孤影悄然として広野に疲れた一老人すら美しい美であります。かかる美は、いわゆる、美醜を超えたる美であります。

万物の差別相に即した、平等相の直感であり、その表現であります。即ち美醜を超えてのみ、ほんとの美がわかるのであります。若き男女の心中の中に美があり、鼻かげそのものが美である所以であります。即ち藝術的創造は、美醜を超えることであらねばなりません。これ芸術が持つ宗教的態度であります。

これを推して、聖人の善悪一如の世界を考えてゆきますと、善は悪に対立し、悪は善に相對する世界では、真実の善はわかりません。善悪共に否定される所に、悪と対立しない絶対善が生かされるのであります。即ち、南無阿彌陀仏は『諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり、極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く。』とは、如来は円満成就されたる絶対善であることを述べられたのであります。この善悪を超えて、絶対善に生きる世界こそ宗教でなくてはなりません。即ち聖人が、和讃において、

「久遠劫よりこの世まで あはれみましますしるしには

仏智不思議につけしめて 善悪淨穢もなかりけり。」

と述べられたが如く、善悪、淨穢以前に、仏智不思議こそ生きなければならぬ。仏智不思議の生きる所、善、悪共に絶対善の内容としてそのままに生かされるのであります。而して南無阿彌陀仏が我に廻向顕現した場合、これを大信心と言われますが、この大信そのものが仏智不思議より生れるものである以上、信そのものが絶対善であります。この大信心と言われる絶対善こそ、善悪、淨穢一切を平等に摂取してそれぞれに生かしきるのであります。

型に入つて型を出す

さて次には、芸術において直感されたる美の表現の形式についてであります。ある日私の子供の六歳になるのが、お父様を書くのだとて、お月様のような丸い顔の中に眼鏡、髪等を入れ、手足を描いた無邪気な絵をもつて来ました。如何にも、自然な純な絵であります。そこには何のこだはりも、はからいもありません。けれども、これが果して芸術でありましょうか。如何に自然でもこれに万金を投ずる者はありません。幼児の絵はそこに型を持ちません。随つて個性の光がなく、創造や深みを持つていないからであります。自然は自然でも盲目的自然であります。したがつて一種の気まぐれであります。真実の芸術家は、必ず悲痛な精進努力を通しています。そこに一つの骨格、型をもちます。しかしその型だけがあり、筆の先の技巧だけがあつて、澆刺たる生命の息吹きがない時には死んだ絵になります。ですから一度幼児の無智から進んで努力精進を通して、やがて、再び幼児の原始の心にかえる。即ち型に入つて型を脱した場合には、生きた芸術が生れて来るのであります。

かかる境地は一種の平凡でありますが、かかる平凡こそ実は真実の非凡であります。一本の線をひくにも、一個の陶器を造るにも、自由奔放な大胆さがあらわれないなければならぬ。しかもそれがちゃんと一つの体系骨格をもつていて、かかる世界では、人の賞讃だとか、美だとか、醜だとか、氣に入るとか、よいものを造ろうとか、そうしたはからいが入つていて、許しません。そうしたはからいを超えた時、そ

の人の手によらなければ出来ない、世界中誰も造ることの出来ない、唯この人の個性によつてのみ成就される独特のものが生れて来るのであります。それが即ち美の創造であります。創造されてのみ芸術があります。進歩するためには模倣もいりませ、鑑賞することもいりませんが、いざ純粹芸術の創造には、そうした一切を許されません。彼の全体を打ちつけて造らるべきであります。彼より外に造り得ない個性そのものの光つた自然のものが生れていなければなりません。

このことは、書道にも、茶道にも、華道にも通用することであり、即ち型に入つて型を超越することであり、

はからいを超えて

親鸞聖人ほど、強くはからいの生活をたどつた方もありますまい。しかしその悲痛な努力は、遂に聖人をして一切のはからいを脱せしめたのであります。人間のはからいを超えて、至上善と自然に法爾に一体になりきり給うたことも、聖人をもつて最上とします。

もし人間の善悪、賢愚、淨穢等の、善、賢、淨をもつて、南無阿彌陀がはからわれる時、そこには、純全な宗教生活、否、人生生活はなくなり、即ち、絶対善たる南無阿彌陀を行ずる心に対する反省が必要であります。もしそこに寸毫でも人間のはからいがまじる時、如来の心は失われて、生々とした如来の絶対淨化はこぼれます。愚禿親鸞とは、愚者にかえり、悪人にかえつて、自然のおんはからいに乗托しきつたところの告白であります。如来の前には善悪共に悪であり、賢愚共に愚である。そこには、人間の思議が否定されて、唯不思議のおんはからいが生きて来ます。模倣も、追従も、ごまかしも、賛成も、言い分けも、全てが役立たない。かけひきのない人間、さながらの相の上に、聖なる如来の力が働いて、おちついた安心の中に、ありのままの人生を抱いたまま、その人自身の個性が光りあらしめられるのであります。

個性が輝けば輝くだけ普徧平等の如来の至上善が生きてゆくのであります。如来は涅槃であります。一如平等の涅槃が差別相の上に輝いて「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」と、差別のままが平等の光に輝く世界、即ち淨土を創造するのであります。でありますから聖人は、和讃に

「本願円頓一乗は逆悪摂すと信知して

煩惱菩提体無二と すみやかにとくさとらしむ。」と逃べられています。

本願円頓一乗とは、本願の称号は、円満に、頓速に、成就された大善であつて、一切衆生が平等に乗せて渡される大乘（一乗）である。故に如何なる逆悪も摂取されると思はれ、煩惱と菩提と体は二つ無いと、速かに、一念に、大悟せしめられるのであります。至上絶対善は一切を超えて、一切を生かしきるのであります。悪自体を直ちに善たらしめるのであります。かかる力を、いわゆる「莊嚴淨土の本願」と言います。淨土を創造するものは、かくして、如来自然の力以外にはあり得ません。

信力

かかる莊嚴淨土の本願に生きた世界を願生淨土、あるいは往生淨土と言います。そして往生淨土はただ金剛の信心によつてのみ可能であります。金剛の信心こそは、善悪、賢愚、等々の対立やはからいを超えて、ただ本願の大道を生ききります。ただ善悪を超えるのみならず、如来の智慧光がその道を照らして、何に力を入れて生きてゆくべきか、何が迷妄であり何が真実であるか、我等如何に生きべきであるかを信知せしめ、不斷に迷妄の自己を清算して無上正真道を生活せしめるのであります。

如来の本願力に乗托する者は、金剛の意志、熱き感情を失いません。智慧を底力とするこの情意が時に生命すらすてて真理に生ききらしめます。唯善悪を超えるのみならず、苦楽、順逆一切を超えてゆきます。この信力なくしては一切は超えられず、一切を超えなければ信力は顕れません。如来なくして何の創造がありません。真理なくして何の創造がありません。その如来と一体なるところ、その人を通して如来は不斷に、彼を顕現し、創造します。

一切衆生はこの如来本願の大道に帰して生きべきであります。